

キュウリべと病

1 病原の特徴

キュウリべと病は、被害葉の病斑上にできた分生子が風などで飛ばされて伝染します。葉に付着した分生子は、水滴により発芽し菌糸が気孔などから侵入して発病します。侵入した菌糸は、葉の組織内で吸器を作って栄養分を吸収します(写真1)。



写真1 ベと病菌の分生子

2 被害の様子

- (1) 露地栽培や施設栽培で一般的に発生する病気で、葉だけに発生します。初め境界のはっきりしない黄緑色の斑紋が現れ、次第に葉脈に区切られた黄褐色の角型病斑になるのが特徴です。キュウリ斑点細菌病と似ていますが、葉の裏面にかびが見えるので区別できます(写真2、写真3)。
- (2) ほ場の株では、下葉から発生し次第に上葉に広がります。発病が激しい場合は下葉が全部枯れてしまい、収量が減るとともに果実の曲がりが多くなります(写真4)。
- (3) 育苗時に発生した場合は、子葉が黄化し葉裏にかびを生じます(写真3)。



写真1 葉の病徴

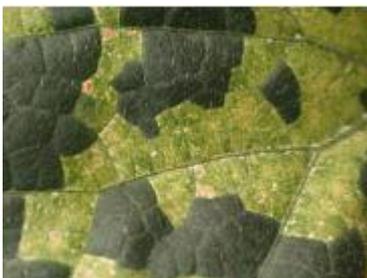


写真2 角型の病斑



写真3 子葉の病斑



写真4 多発したほ場

3 発生について

- (1) ベと病菌の感染は、15～28℃で起こり、最適温度は20～25℃です。
- (2) 施設栽培では、換気不良、灌水過多、畦間灌水など湿度を高めるような管理をすると発生しやすくなります。
特に、サイド周辺や上部カーテン付近に多発しやすい。
- (3) 肥料切れすると樹勢が弱り発生しやすい。
- (4) 軟弱な株は、病斑が早く発現します。
- (5) 育苗時に発病した株を本ぼに持ち込むと多発します。

| 栽培場所 | 発生しやすい時期 | 発生する箇所 |
|------|-----------------------------------|----------|
| 育苗ほ場 | 本葉が1枚出てくる頃 | キュウリの子葉 |
| 本 ぼ | 主茎の摘心時から更に生育が進んで、茎葉が繁茂し湿度が高まってくる頃 | ある程度大きな葉 |
| | 果実の収穫最盛期に入り、草勢が衰えてくる頃 | ある程度大きな葉 |

4 防除適期と防除方法

- (1) 耕種的防除
 - ア 本ぼには、無病の苗を定植する。
 - イ 雨滴の跳ね上がりを防ぐため、フィルムマルチを行う。
施設栽培では換気を十分行い、灌水過多にならないようにして多湿を避ける。
 - エ 密植を避け、通風を良くする。
 - オ 肥料切れや、なり疲れをさせないよう施肥管理を行う。
 - カ 施設栽培では、夏の高温期に密閉して蒸し込み処理を行うと、病原菌の密度低下に効果がある。
 - キ 露地栽培では雨よけを行う。
 - ク 抵抗性品種を栽培する。
- (2) 薬剤防除
 - ア 薬剤は葉裏にも十分付着するように散布する。
 - イ 露地栽培では降雨後に多く発生するので、降雨の前後に薬剤散布を行う。
 - ウ 薬剤は耐性菌発現のおそれがあるので、同じ系統の薬剤を多用しない。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県